

高橋博幸教授をお送りするにあたって

経営学部長 池 田 伸

高橋博幸先生は今年度定年を迎えられ、2017年3月末をもって退職されることとなりました。ご着任以来、私たち経営学部および全学のスペイン語教育や研究の発展に大きく寄与されました。ご功績に対して深甚の謝意を表しつつ、この『立命館経営学』を高橋先生のご退職記念号として謹呈させていただきます。

高橋先生は、1976年3月に南山大学外国語学部イスパニア科をご卒業後、京都外国語大学大学院外国語研究科イスパニア語学専攻に進まれました。在学中にスペインのナバラ大学への留学を経て同研究科を1982年3月に修了され、その後九州の各所の大学でスペイン語関係の非常勤講師を務められました。1991年4月から長崎外国語短期大学外国語学科スペイン語専攻に専任講師として着任され、短期大学の改組等により2001年4月から長崎外国語大学助教授、次いで2006年4月に同教授に昇任されました。立命館大学へは2008年4月から教授として赴任され、それ以来今日に至るまで経営学部および全学のスペイン語にかかる教育研究にご尽力いただきました。

高橋先生のご専門は、スペイン演劇とくに黄金世紀の「コメディア・ヌエバ」の研究です。2016年は、シェークスピアおよびセルバンテスの没後400年に当たりますが、そのセルバンテスをして戯曲の筆をほとんど折らせしめた（その結果われわれは「ドン・キホーテ」を持つことができました）、ロペ・デ・ベガの作品をおもな対象とされています。高橋先生のご研究はたんに文献批判や材源探求、批評に止まらず、当時の「コメディア・ヌエバ」の常設舞台と上演のありさま、当局の規制や経営の実態から観客の消費（観劇）にいたるまで、バロック演劇のいわば再現を目指したものです。この方法論の特徴は近作のフェリペ2世の人工都市マドリードのバーチャル的パノラマガイドにもいかに発揮されています。また、時代と空間とをまたいで、新大陸での演劇の受容やラファエル・アルベルティについても研究されています。これらの成果によって、高橋先生は日本イスパニヤ学会、京都セルバンテス学会、日本演劇学会などの学会の発展に大きく貢献されました。

高橋先生の経営学部・経営学研究科の教学へのご貢献にも多大なものがあります。ご担当のスペイン語の授業では、外国語にイマージョンする環境を教室で構築され、スペイン語初修者である新生にもアクティブに学べるような工夫をされました。また、スペインの大学への短期留学のコーディネータをされるなど教室外での学びにも熱心に取り組んでいただきました。

そのご努力もあり近年スペイン語履修者はおおはばな増加をみえています（サッカーの影響も多少あるでしょうが）。教養教育科目の担当，初修外国語・スペイン語部会の運営，経営学部の学生主事など全学の教学や大学行政でも大いに活躍されました。

このように高橋先生におかれましては熱心に教育研究に取り組んでこられました。引き続き，本学特任教授として，ご健康でますますのご活躍をいただけますよう祈念しております。今後とも，本学に対して特段のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。